

【V】 野山を染める夏草

『夏草や兵どもが夢のあと』は、芭蕉の奥の細道に記された一句である。この句は一関の『毛越寺』に石碑が立てられており、陸奥の旅行コースには必ずといってもいいほど入っている。しかし観光地とはいえ、周辺はまったくの水田地帯である。日頃のサラリーマン生活の中では、こうした水田地帯にも、また夏草などにも気を止めることもないが、現地に行ってこの句を繰り返し読み返してみると、なぜか夏草にも芭蕉の、なみなみならぬ愛情が込められているように見えてくる。

しかし農業を行なう者にとって、夏草は大敵である。夏の最中に刈り払い機で草を刈っても、一週間もすると一体いつ刈たんだっけ、と思うほどに次ぎなる草が育っている。だからこそ農民たちは雑草に憎しみを込めて、差別的な言葉で呼んだことは、すでに花水木(01-04-15-6)のところでも述べたとおりである。もしも夏草がなかったら、おそらく夏の農業は半分の人手で十分であろうし、現実にヨーロッパの牧畜にいたってはこれに近い。日本では夏草は瞬く間に伸びて堅くなってしまふのに比して、ヨーロッパでは、降雨不足もあってなかなか伸びない。そこに放牧された牛や馬が、少し伸びかけた草を食んでしまうから、夏草といえども大きく育つ暇がない。

人間はどんな英知を集めたとしても、自然にはかなわない。そして草といえども自然の一部分であることは、認めざるを得ない。草を取ることに腐心するよりも、草と共に生きる工夫をすることのほうが、ずっと合理的と言うべきかも知れない。また最近ではそんな研究も進んでいる(03-03-12-2 クスノキの項参照)。

そして芭蕉の句を再度読み返してみると、そこには人間と夏草の関係や、この大地に生きた人間ドラマまでが、さりげなく込められているように見える。

さて人間と夏草がこの大地の上で共存して行くためには、夏草の性質を、夏草の文化史を多少とも知っていた方がよいであろう。ここではその中から人間にとって有益とされてきたものを取り上げて、我々の祖先と夏草の関わりを探ってみることにしよう。

※多年草と越年草＝一般的に樹木類は長寿命のものが多く、白樺や、ソメイヨシノの寿命は短いといっても 100 年に及ぶ。しかし草本類は寿命の短いものが少なくない。草本類では春に芽を出して花をつけ、秋までに結実して枯れてしまう一年草。前年の秋に芽を出して翌春に花をつけて、その秋には枯れてしまう二年草。これは特に越年草ともいわれている。さらに毎年都合のいい季節に芽を出して花を咲かせ、暑すぎたり、寒すぎたりすると地上部だけ枯れてしまう多年草など、さまざまである。しかし基本的に言えることは、それぞれの植物にとって、最も繁殖しやすい形態をとっているということで、一年草は連作を嫌う植物の究極的な生存手法なのだろう。



上は千曲川の源流付近(長野県川上村)。下は夏草の茂る原で、猫も夏休み(長野県美ヶ原)。

この項に記されている植物のリスト

【V】 野山を染める夏草

03-05-00-1

- | | |
|---------------------------|------------|
| 1) ドクダミ=十薬 | 03-05-01-1 |
| 2) タデ=蓼 | 03-05-02-1 |
| 3) ギシギシとスイバ=羊蹄と酸葉 | 03-05-03-1 |
| 4) カラスウリ | 03-05-04-1 |
| 5) ヤブカラシとヘクソカヅラ=烏瓜と藪枯と屁糞蔓 | 03-05-05-1 |
| 6) カタバミ=酢漿草 | 03-05-06-1 |
| 7) ツキミソウとマツヨイグサ=月見草と待宵草 | 03-05-07-1 |
| 8) アザミ=薊 | 03-05-08-1 |
| 9) ギボウシ=擬宝珠 | 03-05-09-1 |
| 10) ネジバナ=振花=文字摺り | 03-05-10-1 |
| 11) ウチョウラン=羽蝶蘭 | 03-05-11-1 |
| 12) エノコログサとチガヤ=狗犬草と茅萱 | 03-05-12-1 |
| 13) トラノオとイブキトラノオ=虎尾と伊吹虎尾 | 03-05-13-1 |
| 14) ウメバチソウ=梅鉢草 | 03-05-14-1 |
| 15) アシ=葦・蘆 | 03-05-15-1 |
| 16) マコモ=真菰 | 03-05-16-1 |
| 17) イグサ=藺草 | 03-05-17-1 |
| 18) ヒシ=菱 | 03-05-18-1 |

目次に戻る
